

# 学内広報

2014.7.25

no.1456



この人は  
誰でしょう?  
※答は次頁に

大学史資料と法人文書を管理・活用する新組織

## 東京大学文書館をご存知ですか?

NHK Eテレの人気番組が

## 小石川植物園の歌をつくってくれました

歴史的資料の活用で大学価値を向上させるための

# 東京大学文書館を

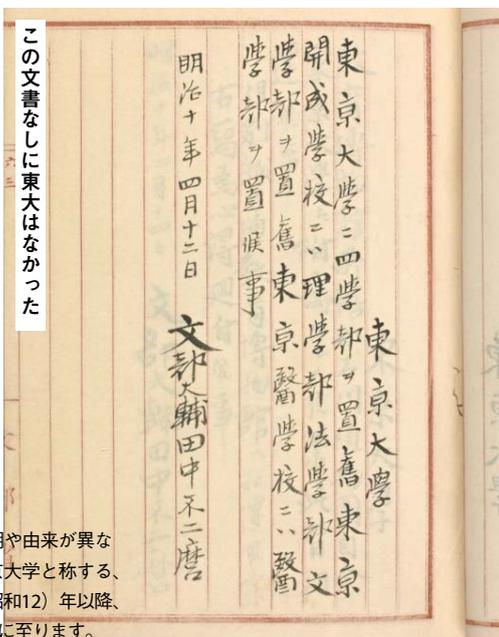
### ① 文部省往復 (1872年)



フルベッキの給与は600円  
↑お雇い外国人の給与は一人一人異なっており、その都度、文部省に伺いをたてて認めてもらう必要がありました。ちなみにフルベッキの月給は他の外国人教師の3倍以上でした。

→東京大学は、学部毎に成立した時期や由来が異なりますが、以後それらをまとめて東京大学と称すると通達された時の文書です。1937(昭和12)年以降、この日は大学記念日と指定され、現在に至ります。

### ② 文部省往復 (1877年)



この文書なしに東大はなかった

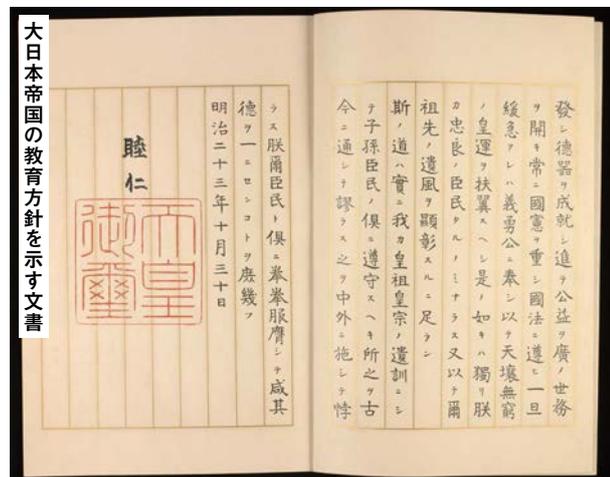
### ③ 渡辺洪基肖像画



初代総長はこの方

↑ご存じでしたか？東京大学の初代総長です。歴代総長のうち唯一の「教職員出身でない」総長で、もともとは外交官・行政官でした。その手腕への期待に違わず、草創期の大学のインフラ整備に力を発揮しました。

### ⑥ 教育ニ関スル勅語 (1890年)

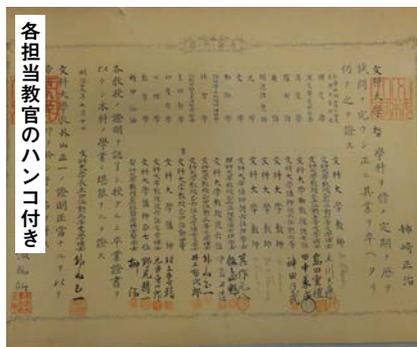


大日本帝国の教育方針を示す文書



←官立学校の下賜された、明治天皇の署名入り膳本です。戦後の回収の動きにもかかわらず、菊の御紋のついた専用の漆塗りの文庫とともに残されてきました。残存する唯一のものかもしれません。

### ⑦ 卒業証書 (1896年)



各担当教官のハンコ付き

↑かつて、このように履修した各科目の全教授がサインする形式の卒業証書を出していた時期がありました。姉崎正治は後に本学教授となり、関東大震災の時には図書館長として図書館復興に尽力しました。

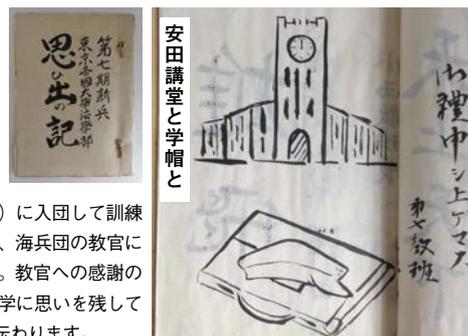
### ⑪ 学徒出陣壮行会で学生に渡した日章旗 (1943年)



出陣学徒へのはなむけ

←出陣学徒に贈られた総長揮毫入りの日章旗。物資も底をついていた1943(昭和18)年、在学生等からの衣料切符の寄付を受けて、旗の布地を調達しました。送り出した大学の思いやいかに。

### ⑫ 出陣学徒の寄せ書き (1943年)



安田講堂と学帽と

→大竹海兵団(広島県)に入団して訓練を受けた法学部学生が、海兵団の教官に贈ったお礼の寄せ書き。教官への感謝の言葉を綴りつつも、大学に思いを残していることがひしひしと伝わります。



# ご存知ですか？

2014年4月、総長室総括委員会の下に新しい機関が設立されました。従来の東京大学史料室が発展して生まれた東京大学文書館です。ここでは、収蔵物のごく一部を紹介するとともに、設立に尽くしてきた吉見俊哉副館長に館の3つの役割について語っていただきました。歴史的資料によって大学の価値を高める文書館の今後にご注目ください。

## → 文書館アーカイブより ←

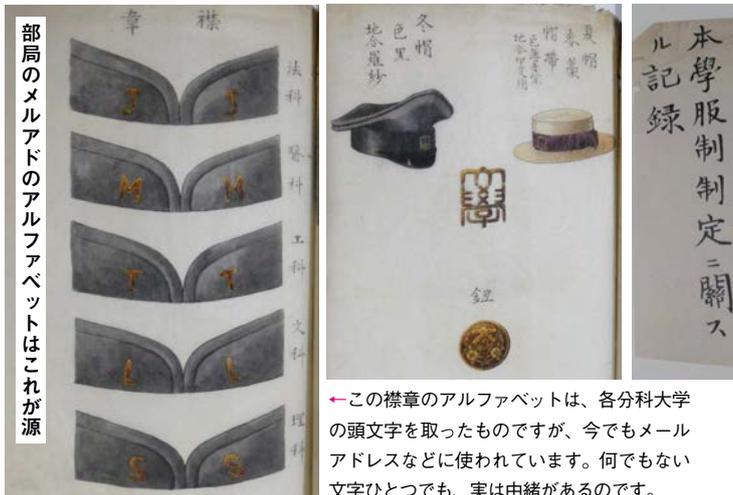
数多の収蔵物の中から、東大の歴史をたどる16点を紹介します(紹介文執筆は文書館の森本祥子先生)。  
※ ●は大学の公式記録資料、○は寄贈資料です。

### ④ 銀製カップ (1889年)



明治22年のレース優勝者に授与  
↑ 1889(明治22)年、陸上運動会の440ヤードレース優勝者に司法省法律顧問から贈られたもの。当時はこのように競技の勝者に有力者から銀製カップが贈られる習慣がありました。

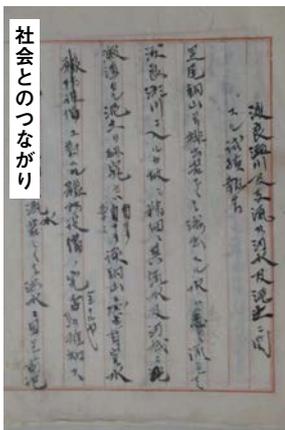
### ⑤ 制服に関する規定 (1886年)



部局のメルアドのアルファベットはこれが源

←この襟章のアルファベットは、各分科大学の頭文字を取ったものですが、今でもメールアドレスなどに使われています。何でもない文字ひとつでも、実は由緒があるのです。

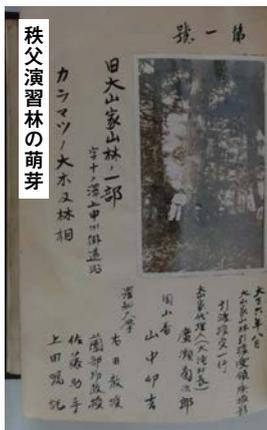
### ⑧ 足尾鉍毒事件調査 (1902年頃)



社会とのつながり

←農科大学教授(後に総長)の古在由直は、農民・政府双方から請われて足尾銅山の公害調査に携わっていました。公害や貧困などの社会問題の改善に目を向けていた帝大教授は案外いたのですよ。

### ⑨ 大山柏公爵所有地調査 (1917年)

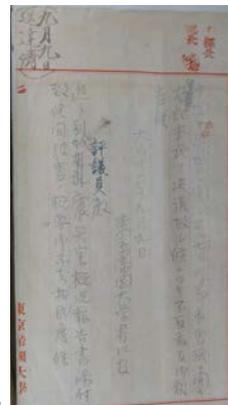


秩父演習林の萌芽

←秩父演習林の一部は、大山柏公爵(大山巖・捨松夫妻の次男)の所有地を購入したものです。ブナ、ナラ、シデが多く、牧野富太郎が学名を付したクマシデもあります。

→ 本学の建物等の被害について、震災直後に学部毎に集約し評議員に伝えた記録です。同時に、大学が罹災学生・教職員の救済にも力を入れていたことが文書からわかります。

### ⑩ 関東大震災直後の文書 (1923年)

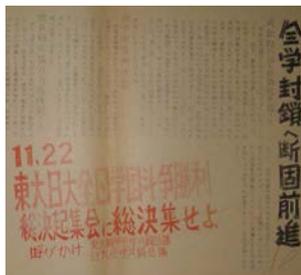


### ⑬ 新制東京大学設置に関する文書 (1947年~)



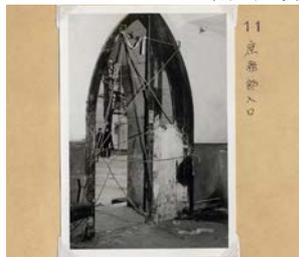
↑ 戦後、新制の東京大学の設置準備をする過程で作られた文書です。いわば現大学の母子手帳というところでしょうか。戦争直後で紙の質が大変悪く、取り扱いには気を遣います。

### ⑭ 東大紛争時のピラ (1968年)



↑ 文書館には沢山のピラが保存されています。大量に作られたその量そのものが、これだけ言いたいことがあったのだ、という当時の強いエネルギーを今に伝えます。

### ⑮ 東大紛争による安田講堂被害記録 (1969年)



↑ 安田講堂の攻防のあとの状況の記録。主義主張のぶつかりあいとは別に、大学財産の管理という視点からの記録は、事実を淡々と、しかし正確に伝えるものとして貴重です。

### ⑯ 百周年記念事業に関する文書 (1973年~)



↑ 1877年の東京大学設置を起源とし、1977年には百周年を迎えました。その一環として『東京大学百年史』が編纂されました。さあ、次は150周年です!

(次ページにつづく)



～キャンパスニュース～

# Eテレの人気番組『2355』が 小石川植物園の歌<sup>♪</sup> (理学系研究科附属植物園) をつくってくれました



『小石川植物園に行ってみました』  
作曲・うた..近藤研二  
作詞..うちのますみ・佐藤雅彦

① 天気がいいのでぶらぶらと  
小石川植物園に行ってみました  
案内図片手に歩き出す

② ソテツの坂を登ると街の音消える  
樹形図のようなヒマラヤスギの  
枝を見上げて鼻から深呼吸

④ サクラの林を遠目に見ながら  
ちよつと右に行ってみる  
メンデルのぶどう  
ニュートンのリンゴの木

⑦ イロハモミジの並木の途中  
独特な形状の温室に入る  
食虫植物 ウツボカズラ  
葉脈だけの水中のレース草  
メダカが起こす小さな波紋  
ここは植物園  
ここは植物園  
東京大学の附属の植物園



「小石川植物園」の名で親しまれている理学系研究科附属植物園は、1684年に徳川幕府が設けた小石川御薬園に源流を持つ日本最古の植物園です。約16万㎡の敷地内に4000種以上の植物があり、植物学研究・教育における世界的センターとして機能する一方、その歴史的価値の高さから国指定名勝及び史跡として認められ、広く一般の皆さんにも公開されています。このほど、NHK Eテレの人気番組「2355」が、そんな植物園をテーマに歌をつくってくれました。園内の特徴的な植物や設備を逃さず織り込んだ歌詞にのんびりと柔らかな曲調が組み合わさった一曲です。チャララランラララントと口ずさみながら園内を散策し、300年以上の歴史に思いを馳せてみては？

## 8月の小石川植物園

1年を通じて様々な植物を自然の姿で見ることが出来る小石川植物園では、照りつける夏の日射しの中で木々の緑が大きな日陰を作っています。見上げると、どんぐりをつけるシイやカシの仲間、イチヨウ、ボダイジュ、ブラタナスをはじめ、春から初夏にかけて花をつけた木々の実もしっかりと成長しているのがわかります。花は正門前のソテツをはじめ、キョウチクトウ、ムクゲ、サルスベリ、フジツギ、ニンジンボクなど。アゲハチョウがやってきますね。森の下ではミズヒキやヤブミョウガが咲いています。珍しいのはメタセコイア林の近くにあるタニワタリノキの大木です。小さな花が白い玉のように集まって、枝先にたくさんつきます。中国の薬用植物、キジュの花とよく似ています。日本庭園に散らばる池は夏の風情に。ミズカンナも花の時期です。

小石川植物園園長  
邑田 仁 教授



## 『2355』

毎週月～金曜の23:55からEテレで放送中の、見ると気持ちよくリラックスできる5分番組。兄弟番組の「0655」とともに佐藤雅彦さん（本学教育学部ご出身！）が監修を務めています。上の画像は5月放映時のもの。現在は残念ながら歌の放映はありませんが、9月には新バージョンが放映されるかも…。<http://www.nhk.or.jp/e2355/>

## 『Life in Green』プロジェクト

理学系研究科附属植物園を整備して社会に開かれた植物園へと発展させるプロジェクトが「Life in Green」。東大基金では、このプロジェクトを支援するための寄附を募っています。歌にも登場する「独特な形状の温室」の改築を2015年度に実現するため、皆様のご協力をお願いいたします。<http://green.todai-kikin.jp>

教養教育の現場から

第4回

## リベラル・アーツの風

創立以来、東京大学が全学をあげて推進してきたリベラル・アーツ教育。その実践を担う現場では、いま、次々に新しい取り組みが始まっています。この隔月連載のコラムでは、本学のすべての構成員がぜひ知っておくべき教養教育の最前線の姿を、現場にいる推進者の皆さんのレポートでお届けします。

## 授業を通じた「タフでグローバル」な学生の育成

全学自由研究ゼミナール／「平和のために東大生ができること」[サステイナビリティ・オランダゼミ]

教養教育高度化機構体験型リーダー養成部門  
総合文化研究科・特任准教授

岡田 晃枝



## 十分な準備が海外での成功体験のカギ

学生に海外体験をさせるためのプログラムは充実してきましたが、語学力向上や現地事情把握等をアドバイスする以上の事前準備を提供するプログラムは稀少です。学術的な議論ができるように準備してゆけば、短期間の海外研修でも十分な成功体験となり、留学等、次のステップに向かうための自信にもなります。全学ゼミ「平和のために東大生ができること」は、学期中のキャンパスでの学びと、続く長期休暇中の海外研修を組み合わせた授業です。紛争と平和に関わる授業テーマを学期ごとに定め、学内外の研究者や実務者の協力を得て学んだ上で、その授業テーマに関係の深い海外の国や地域で研修を行い、現地の関係者や交流先大学の学生と議論して学びを深めます。学生たちは、学んだことを知識としてインプットするだけでなく、海外研修先で意見交換やディスカッションを英語で行えるようになる必要があります。また、エクスカージョンなどを通じて長時間現地学生と過ごすので、授業テーマのほか、

互いの文化、生活、将来など幅広い話題について深く語り合うことになります。履修生たちには、現地での議論を想定したトレーニングや、日本に関するプレゼンテーションなど、授業外の時間も使って十分に準備をさせます。

平成25年度夏学期は、平和構築における日本の貢献をテーマとし、2010年に民族衝突を経験したキルギスで海外研修を行いました。アメリカ大学中央アジア校およびキルギス国立民族大学が、専門家によるレクチャーと学生ディスカッションを開催してくれました。また、両大学の教員および学生とともに合宿や遠足を行い、そこでさらに議論を深めました。

## ラオスでは不発弾処理の学習も

冬学期は企業による国際貢献活動に焦点を当て、いくつかの企業を訪れて話を聞きました。その中から、民間企業の活動とODAの連携事業「成長加速化のための官民パートナーシップ」の対象となったラオスにおける不発弾処理についてさらに詳しく学んだ後、研修でラオスを訪れ、日本側の関係者だけでなく不発弾

処理を管轄するラオスの政府機関の専門家とも意見交換を行いました。

学生からは、「不発弾の恐怖から人々を救うという目的を共有していても、日本とラオスで立場と視点が違うことを肌で感じ、複数の視点を組み合わせることで考えることの大切さにあらためて気づいた」(文I・2年)、「現地の学生との交流で、宗教観や家族観など、しばしば決定的な考え方の違いを感じた。世界は『違い』に溢れている。それに出会わず気付かずに生きていくことも可能かもしれないが、『違い』にたくさん出会うことで自分の世界観を広げることが出来る」(文II・1年)など、多様な視点の獲得や切磋琢磨できたことへの満足感、異なる規範・慣習との出会いからくる驚きなどが感想として挙がっています。

平成26年夏学期は民主化、冬学期は安全保障と経済に焦点を当て、夏はトルクメニスタン、冬は米国で研修予定です。また、同じ部門の坂口菊恵特任講師による全学ゼミ「サステイナビリティ・オランダゼミ」(冬学期)では、多様性を保障する社会のあり方について学び、オランダでの研修が行われます。



国連軍縮部でデュアルテ軍縮担当事務次長(当時)に、自分たちでインタビュー・英訳した被爆証言集を手渡す履修生たち。(2011年度)



研修受入れ先のキルギス国立民族大学の学生たちとともに、イシク・クリ湖への合宿へ。(2013年度)

# ききんの「き」

—東大基金で森を動かす—

第15回

学内でも利用者が増えている「古本募金」、今回は年度末に実際に古本募金を利用された前理事・副学長の佐藤愼一文書館館長からのメッセージをお届けします。

**佐藤 愼一** 東京大学文書館 館長

## 東大基金古本募金の勧め

大学教員にとって書物は最も大切な研究工具であり、研究室に数千冊に及ぶ書物を蓄えている教員も少なくない。書物の山に囲まれているとき、彼らの心は最も安らぐ。そして、書物を愛するがゆえに定年退職の日を間近にした彼らが最も悩むのは、愛する書物をどうするのかという問題である。再就職先に書物をそっくり移せる人や自宅に広大な書庫を持つ人は、悩む必要はない。だが、現実にはそのような幸運な人は少数派であって、大部分の教員は書籍の選別と処分を迫られることになる。彼らは先ず今後の研究に不可欠な書物や特に貴重な書物を選び出し、自宅に送るはずである。次に専門書を使ってくれる研究仲間や学生たちに無償で贈呈する。それでも膨大な書物が残るはずだ。これをどうするか。図書館は無償でも引き取ってくれない。捨てるのは書物がかわいそうだ。古本屋と値段交渉するのは煩わしい。そう考える人々にとって最善の方法は、東大基金古本募金を利用することである。

古本募金の最大のメリットは、手間がかからないことである。書物をダンボール箱に入れ電話すれば、指定の日時に宅急便業者が引き取りに来てくれる。運搬費用は不要である。何回かに分けて出せば、精神的にも肉体的にも負担は少ない。買い取り価格はすぐに郵便で知らせてくれる。購入したときの金額に比べればはるかに安い。これで書物が無駄にならず、かつ東京大学の財政に多少なりとも貢献できると思えば、心もなごむ。古本募金は、自宅にも引き取りに来てくれる。だから、まずは自宅に多めに書物を送り、書齋に入りきらない分を引き取ってもらうのが、賢明な方法である。古本募金をうまく活用すれば、定年退職にまつわるストレスを大幅に軽減することが可能である。



研究室で書籍整理する佐藤先生。募金行き本も沢山！

東京大学基金事務局 「東大 古本募金」で検索！

TEL 03-5841-1217 ..... E-mail kikin@adm.u-tokyo.ac.jp  
内線21217 ..... URL http://utf.u-tokyo.ac.jp/

# 留学生さん いらっしやい!

第14回

海を越えて東大に来た学生に聞きました。



フィリピン  
ディ・メルビン・チャールズ・  
オーツァ さん

**Dy Melvin Charles Ortua**

学際情報学府  
総合分析情報学コース 修士2年

ルソン島のバギオ市出身。ゲーム、読書、アニメ・漫画が好き。ロックファン。詩や文を書いたり哲学的思索を楽しむ一面も。「若いうちに世界を変えたい」。

## Q. どうして日本に来たんですか？



伝統的なものと現代的なものが混在する日本がおもしろいかなと思い、コンピューターを学んでいた学部時代に何となく日本に行きたくなりました。日本は不思議な国だなと。

## Q. ではどうして東大を選んだんですか？

日本企業（味の素）による奨学金があることを知人から聞き、それを受給することができました。実は、その奨学金が東大を指定していたのですが、日本のトップ大学である東大のブランドに惹かれたのも理由の一つです。



## Q. いま学んでいるのはどんなこと？



人の位置を携帯電話等で追跡すること、グループ移動研究をしています。この研究を活かして起業するのが目標です。今は資金やノウハウが足りないので、まずは経験を積みまます。

## Q. 日本で困ること、東大で好きなことは？

日本文化は外国人が溶け込みにくい部分もありますがそれも興味深い文化です。良い所は安全で食べ物がおいしいこと。カツ丼が好きです！東大企画のランチ交流会も楽しいです。



## Q. フィリピンのいいところは？



ゆったりとしたストレスの少ない生活ができますよ。フルーツも安くおいしいしです。ジープニー（お下がりのジープを使った乗合いタクシー）に乗るのは安全の保証がないけど、フィリピンの代表的な体験の1つかも。



協力：国際センター本郷オフィス 制作：本部広報課

※訂正とお詫び／先月号の当欄に掲載したアメリカ・リー・ジー・イさんの専攻名が間違っていました。正しくは「国際環境学プログラム (GPES)」です。皆様にお詫び申し上げます。

## ワタシのオシゴト 第101回

RELAY COLUMN

理学系研究科等経理課  
研究支援・外部資金チーム

上村 桜子

## ビバ理学系



チリで買ったアルパカのペンがお気に入り。

寄附金、日本学術振興会事業、研究者の受入、バイオサイエンスに関連する業務を担当しています。

理学系で一番印象深かった仕事は東大フォーラム出張の一環として訪れたチリ・アタカマのアルマ天文台。週末はどうすれば家から一步も出ずにすむかを考えて暮らす出不精の私にとっては宇宙にでも行くぐらいの覚悟で行ったのですが、空が濃く、星にあふれた本当に宇宙に一番近い場所でした。標高5000mでも倒れなかった自分にも驚きましたが、何よりも酸素も薄くこんなにも遠いところで研究を行う研究者の熱意に驚き尊敬するばかりでした。

プライベートでのこれからの目標は運動不足を解消すべく、お休みしていた Bollywood ダンス（インド映画で急に登場人物総出で踊りだす、アレ）を再開することです。



研究推進担当の皆さんと一緒に。

得意ワザ：Y字バランス。柔らかく踊れます。

自分の性格：まじめな面倒くさがり。

次回執筆者のご指名：持川起代さん。

次回執筆者との関係：幼馴染で偶然同期。

次回執筆者の紹介：穏やかなクールビューティー。

## Crossroad

産業界と大学がクロスする場所から、産学連携に関する“最旬”の話題や情報をお届けします。

産学連携本部

第104回

## 商標ってどんなもの? (その1)

「香港の企業が中国で『紀州』を商標登録出願」「大分県、『おんせん県おおいた』でやっと商標登録」

近年は商標に関する話題がテレビや新聞で報じられることも多くなってきました。今回から商標について説明していきます。

商標 = 標章 × 商品・サービス

「商標」という言葉から何をイメージするでしょうか。ブランドの名前や企業のロゴマークを想像する人が多いのではないかと思います。このイメージは概ね正しく、しかし不十分なものです。

商標法では文字や図形などを標章といい、商品やサービスに使用する標章を商標といます。ブランドの名前や企業のロゴマークは、それを特定の商品やサービスに使用したとき初めて商標となります。

なぜ標章と商品・サービスの組み合わせで考えるのでしょうか。商標には自分の商品やサービスを他人の商品やサービスと区別するという機能があります。自分の商品やサービスを他人の商品やサービスと区別したい。だから自分を表す標章を付けるのです。

商標を考えるときには名前やマークだけでなく、それをどのような商品やサービスに使うのかを考えることが大切になります。

## 東京大学の商標

東京大学でも大学名の「東京大学」やシンボルマークの「銀杏マーク」を商標登録しています。これらはどのような商品やサービスに使われるでしょうか。実際には様々な商品やサービスに使用することを想定して商標登録を行っていますが、東京大学の主な業務は教育と研究です。したがって、例えば講義で用いるスライド資料に「東京大学」や「銀杏マーク」を付けると、商標を使用したとなるでしょう。(知的財産部)



東京大学

商標登録第4868078号

商標登録第4871651号（マークの商標はモノクロで登録）

<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>

## インタープリターズ・第84回 バイブル

総合文化研究科 特任講師  
教養学部附属教養教育高度化機構  
科学技術インタープリター養成部門

山邊 昭則

### インタープリターは世界を駆け巡る

このリレーエッセイの機会も4回目を迎えた。初年次教育から大学院教育まで、任務の幅も広がり、書く材料も多いが、これまでを振り返ってみると学士課程教育についての執筆が多かったので、今回は大学院のほうについて書いてみようと思う。当プログラムは東大全学の大学院生に開かれており、これまで、総合文化、理学、医学、薬学、工学、人文科学、教育、公共政策など、多くの研究科からの参加に恵まれた。修了生は、現在、科学技術行政官、本学の大学教員や海外で最先端の研究を進める研究者、科学を魅力的に伝える出版編集者、震災や言論に向き合う番組製作者などとして未来を切り開いている。

さて、プログラム受講生は入学後、自らの研究計画に基づき、指導教員を決めて、修了研究を進める。テーマは、アウトリーチ、科学技術政策、科学研究のELSI（倫理的、法的、社会的課題）など多岐にわたる。三年前、最初に私を指導教員として希望されたのは理学系研究科の博士三年生、主専攻の博士号取得と副専攻の修了が同年に求められる学生であった。副専攻は上半期に調査を履行し目途をつけ、下半期は博士号の取得に最大限の力を注いだ。本人の努力あって、学位取得と副専攻修了をともに達成し、今は欧州で研究者として活躍している。先週、フィレンツェでの学会の帰りに、パリの空港ですれ違っていたことを翌日のSNSで互いに知り、大いに驚きあった。地球上で偶然そうした出来事が起こるのも当プログラムの良さと思う。

今年度は、東大病院で臨床経験を積み、副専攻での研究も国際的に発信することを検討している学生、King's College Londonを出て、WHOで勤務を経た学生の両名から指導教員として希望をいただいた。貴重な就業経験や学術経験の後、改めて博士課程で研究に取り組むことに加え、さらに副専攻を履修し、知的活動の幅を広げようと努める姿勢に心から敬意を抱く。まもなく堅い信頼関係もできた。今朝も、もう一人の学生を含めて、東京、ミラノ、シンガポール、そしてInternational Conference First Year in Higher Educationへの出席のためダーウィンに滞在中の私と、研究について連絡し合ったところである。

当プログラムは、関係の先生がたと皆様、そして、本稿で触れた意識の高い学生たちにより成り立っていると実感する。本学でのこうした教育の機会を心から有り難く感じている。

科学技術インタープリター養成プログラム  
<http://science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp/>

## 救援・復興支援室 より

第38回

本学の救援・復興支援室の最近の状況や、遠野分室の日々の活動の様子をお届けします

### 救援・復興支援室の活動(7月～8月)

7月9日	第21回救援・復興支援室会議
7月～8月	岩手県陸前高田市「学びの部屋」学習支援ボランティア 福島県相馬市「寺子屋」学習支援ボランティア
8月	福島県大熊町の避難生徒への学習支援ボランティア

### ザシキワラシの日常

本部企画課係長(遠野分室勤務)



文：佐藤 克憲

岩手県の花巻市から、当分室がある遠野市を経由して釜石市に至るJR釜石線において、観光面からの被災地の復興支援と地域の活性化を目的に、今年の4月からSLの運行がスタートしています。本年度は9月まで、土日祝日に年間80日程度の運行を予定しているそうで、花巻市出身の詩人・童話作家である宮澤賢治の世界観溢れるレトロな造りの旅客車と合わせて人気を博しており、予約(全席指定)を取るのも困難な状況が続いているとのこと。私も何とか予約がとれ実際に乗車してみましたが、車内に漂う石炭の香りと前述の旅客車の雰囲気がマッチしているのもさることながら、被災地の釜石も含め、どこを通る時も沿線住民の方々がSLに手を振ってくださり、乗客も沿線の方々も笑顔になるこのSLの運行は、復興支援の大きな力になり得ると感じた次第です。

このSL、遠野駅では、石炭補給等の関係でお昼の時間帯に1時間ほど停車し、格好の撮影機会となっていることから、運行日の駅周辺は鉄道ファン等で賑わっています。駅前では観光協会の方々による出迎え以外にも、郷土芸能の演舞や、駅のすぐそばで語り部から「遠野物語」を聞くことができるスポットなども設けられているようです。遠野-釜石間は日にちによっては空席も出ているようですので、遠野観光も含めて被災地での復興支援活動や観光へ向かう際に乗車されてみてはいかがでしょうか。

今回もお読みいただき「オアリガトガンス！」。



(左)田園風景の中を走るSL(この時は横を馬が併走)。

(右)SL旅行者を出迎える郷土芸能の演舞(遠野駅前)。

[http://www.u-tokyo.ac.jp/public/recovery/info\\_j.html](http://www.u-tokyo.ac.jp/public/recovery/info_j.html)

Email : [kyuenfukkou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp](mailto:kyuenfukkou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp)

内線 : 21750 (本部企画課)

## トピックス

全学ホームページの「トピックス」(<http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/topics/>)に掲載した情報の一覧と、その中からいくつかをCLOSE UPとしてご紹介します。

掲載日	担当部署	タイトル	実施日
6月11日	史料編纂所	史料編纂所所蔵『実隆公記』(重要文化財)出陳のお知らせ	6月11日
6月17日	渉外本部	「東京大学基金 感謝の集い」を開催	6月11日
6月17日	医科学研究所	国際学生フォーラム2014に参加	6月1日～5日
6月18日	人文社会系研究科・文学部	第5回東京大学文学部公開講座を開催	6月14日
6月19日	情報学環・学際情報学府	「ダイワユビキタス学術研究館」の寄贈を受けました	5月14日
6月20日	工学系研究科・工学部	MIT学生が本学を訪問、日本語や日本文化を体験	5月28日～6月12日
6月23日	低温センター	平成26年度低温センター安全講習会(第1回・第2回・第3回)開催	5月8日～6月20日
6月24日	本部学生支援課	2014年度双青戦開会式・本学運動会漕艇部の試合が行われました	6月21日～22日
7月4日	新領域創成科学研究科	知の扉を開ける「柏キャンパス in 駒場 2014」開催される	6月21日
7月7日	生産技術研究所	仏リール市に日仏共同研究拠点SMMIL-E*を設置	6月16日
7月7日	工学系研究科・工学部	防災訓練・消防演習が行われる	6月17日
7月8日	人文社会系研究科・文学部	外国人留学生・外国人研究員等との懇談会を開催	6月26日

## お知らせ

人事異動情報など全学ホームページ「お知らせ」(<http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/>)・東大ポータル等でご案内しているお知らせを一部掲載します。

掲載日	担当部署	タイトル	URL
6月20日	本部人事給与課	名誉教授の称号授与	<a href="http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/2567/">http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/2567/</a>
7月1日	本部人事給与課	人事異動(教員)	<a href="http://www.ut-portal.u-tokyo.ac.jp/wiki/index.php/人事異動(教員)">http://www.ut-portal.u-tokyo.ac.jp/wiki/index.php/人事異動(教員)</a>
7月1日	本部広報課	広報センター夏季臨時休館のお知らせ	<a href="http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/2627/">http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/2627/</a>
7月8日	本部法務課	総長選考の開始の公示について*	<a href="http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/2670/">http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/2670/</a>

\*【総長選考の日程】 9月2日(火) 第1次総長候補者の推薦(代議員会) → 9月24日(水) 第1次総長候補者の推薦(経営協議会) → 11月6日(木) 第2次総長候補者の選定(総長選考会議) → 11月27日(木) 第2次総長候補者への投票・総長予定者の決定(総長選考会議)



## CLOSE UP 2014年度の「双青戦」が始まりました(本部学生支援課)



ア式蹴球部主将が総長に選手宣誓。



白熱のレースを制したのは東大!

6月21日(土)、工学部2号館にて、本年度双青戦開会式が執り行われました。双青戦とは東京大学と京都大学の総合対校戦のこと。1924年より両大学の各運動部の間で行われてきた交流戦を2009年度に総合化したものです。

開会式には、京都大学から、赤松明彦理事・副学長、小田滋晃体育会会長が出席されました。本学からは、濱田純一総長、長谷川壽一理事・副学長、古田元夫運動会理事長が出席。本年度実行委員長を務めた本学の中村咲耶さん(医学部3年)は、本対校戦に参加する学生にとって未永く意味深いものとなることを期待する、と挨拶しました。本学運動会ア式蹴球部主将の添田隆司さん(経済学部4年)による選手宣誓、

両大学応援部による演舞が行われ、会場は熱戦を期待するムードに。開会式後にはレセプションが開かれ、参加者が互いの交流を深めました。

翌日には、本学運動会漕艇部と京都大学ボート部との試合が滋賀県大津市瀬田川の特設コースにて行われました。あいにくの天気でしたが、開会式の熱気そのままに、手に汗握る熱戦が繰り広げられました。男子対校エイトレースにおいては、レース中盤まで京大がリード。東大は僅差で追いかけます。そしてゴール直前で東大が最後の力を振り絞り、見事勝利を収めました。

本学は総合対校戦となって以降、未だ総合優勝を果たせずにいます。今年こそ優勝を果たせるよう熱いご声援をよろしく願いいたします。



CLOSE UP

「東京大学基金 感謝の集い」を開催 (渉外本部)



活動報告会・講演会の様子。



濱田総長のご挨拶。

6月11日(水)、「東京大学基金 感謝の集い」を本郷キャンパスで開催しました。当日は、「貢献会員」(累計30万円)以上の学外個人寄附者をご招待し、91名様にご来場いただきました。第一部の会場は小柴ホール。山路一隆渉外本部長より2013年度の東京大学基金の活動報告がなされました。特に「総合的な教育改革」に連動した教育プログラムや奨学金制度について、昨年度は大きな成果があった旨の報告がありました。また、秋山弘子特任教授(高齢社会総合研究機構)により「長寿社会に生きる」と題した講演が行われました。超高齢社会で生きていくなかでの個人、社会構造やコミュニティのありかたの変化などについての講演に、寄附者の方々も熱心に耳を傾けていました。その後、山上会館に場所を移し第二部として

開催したのは、「総長主催懇談会」。冒頭に濱田純一総長が挨拶を述べ、江川雅子理事の乾杯の挨拶の後、本学関係者と寄附者の方々との活発な交流が展開されました。特に今年は部局基金や特定基金プロジェクトの責任者である部局長や教員が出席したため、寄附者とプロジェクト担当者の教員の間で、教員から寄附のお礼やプロジェクトの進捗状況を報告する様子があちらこちらで見られました。会場に特別展示された現在改修工事中の安田講堂の椅子を見ながら「ここに名前が刻まれるのですね」と確認されている寄附者もいらっしゃいました。会の途中では、運動会応援部の演舞も披露され、「ただ一つ」を一同で歌い、大変盛り上がりました。今後とも、東京大学基金へのより一層のご理解、ご協力のほど、よろしくお願いいたします。



CLOSE UP

知の扉を開ける「柏キャンパス in 駒場 2014」開催 (新領域創成科学研究科ほか)



参加者の集合写真。

スーパーカミオカンデをモチーフにしたポスターは、武田研究室・平野滝子さんの力作。



柏キャンパスにある、新領域創成科学研究科、物性研究所、大気海洋研究所、宇宙線研究所、カブリ数物連携宇宙研究機構(IPMU)の5組織が協力して例年開催している新入生・2年生のための交流イベント、「柏キャンパス in 駒場」(素粒子、物質から地球、宇宙)が、6月21日(土)に駒場の数理工学研究科棟で行われました。各組織の長を務める5人の研究者が登壇し、新領域創成科学研究科の武田展雄研究科長は「皮膚感覚のある複合材航空宇宙機を目指して」、物性研究所の瀧川仁所長は「物性の中の電子たち」、大気海洋研究所の新野宏所長は「大気・海洋の謎に挑む」、宇宙線研究所の梶田隆章所長は「ニュートリノ・重力波・宇宙線が宇宙を探る」、カブリ数物連携宇宙研究機構の村山斉機構長は「宇宙に終わりはあるか」をテ-

マに、講演を行いました。どの講演でも、先端研究の臨場感が文系学生にも分かりやすく伝えられ、参加者から多くの質問が寄せられました。部局研究紹介のポスターセッションでは、用意したお茶とお菓子が大分残るほど、講師陣・説明の大学院生と研究の最前線、これからの進路について語り合うことができました(IPMUさながらホワイトボードに数式を書きながら説明する村山先生の姿もこの会ならではの光景でしょう)。日頃多忙な部局長が勢揃いして研究を語る機会は柏キャンパスでもなく、最後のまとめのセッションでは、研究者を目指す学生へのエールも贈られ、駒場生にとってばかりでなく、大学院生、教員にも柏キャンパスを知る有意義なものとなりました。



CLOSE UP

仏リール市に日仏共同研究拠点SMMIL-E\*を設置 (生産技術研究所)



SMMIL-Eラボの前にて。

6月16日(月)に日仏国際共同研究ラボLIMMSの在仏研究拠点SMMIL-E(スマイリー)の調印式および開所式がフランス北部のリール市で開催されました。この拠点は生産技術研究所内にあるLIMMSの仏版としてリール市南西部の広大な医療施設の集合地区にあるオスカー・ランブレ・センター(COL:がん治療に特化)に設置され、式典では野城智也本学副学長およびLIMMS共同ディレクターの藤井輝夫副所長をはじめ、フランス国立科学研究センター長官、COL所長、リール第1大学学長が協定書に調印しました。ノール=パ・ド・カレー地方圏長官も祝辞を述

べ、藤田博之教授によるSMMIL-Eのプレート披露の後、リール生物学研究所で日仏のSMMIL-E研究者によるBioMEMS\*ワークショップが開催されました。その後、生研からの派遣団はSMMIL-Eを訪問しました。この地区は国と地方圏が優先的に投資して建物の建設など開発を進めており、その完了時にはSMMIL-Eも新しい建物に移転する予定です。臨床の現場の直近に設置された研究室には、研究大学強化促進事業の一環として生研の研究者が滞在し、仏側の研究者と共同で、最先端のBio MEMS技術をがんなどの診断と治療に応用する研究を実施する予定です。

\*Seeding Microsystems in Medicine in Lille - European Japanese Technologies against Cancer -

\*バイオ医療応用マイクロシステム



## 医師道について思う

インプラント、咬合学を学ぶため、海外留学を繰り返す父をみて育った。歯科開業医だった。地域での評価と信頼を積み上げていく父の背中を見て、医師を心ざした。進行性肺がんが診断されてからも、放射線治療を受けつつ、自分の医院へ戻っては患者の診療を続けた。不意の脳卒中で倒れる前日まで医師業を続けていた。その後まもなく息を引き取った。

再生しない脳を手術する醍醐味と責任に憧れて脳外科を選んだ。故永田和哉先生は私を支えてくれた最も縁の深い恩師の一人。脳動脈瘤のクリッピング術、脳血管バイパス術を教わった。脳梗塞を煩った父に対して、自らバイパス手術を執刀し治療させた経験も持つ外科医だ。

この出会いが私を変えた。脳外科手術で社会、世界に貢献したいと決意した。自らを脳神経外科手術道に捧げる永田先生の姿を見て、自分もこうなると決意した。その後、手術の達人がいると聞きつけては、おしかけては弟子入りし技術と哲学を吸収する毎日となった。

世界の脳手術の達人から技術と哲学を学びたいと米国に渡った。60代、70代でも尚、第一線で手術治療を確実にやり、世界に貢献し続ける多くの賢人外科医に巡り会った。言語は違っても、手術を通して以心伝心する思いを経験した。脱帽せざるを得なかった。瞬く間に3年3ヶ月が経過していた。

帰国後、米国臨床経験の口演の機会をいただき、永田先生がオーガナイザーを務めてくださった。その夜に頂いた魂に響くメッセージを今でも忘れることができない。脳外科手術をもっともっと高めて、もっともっと社会に、世界に貢献しろ！といわれた。お言葉を

いただいた2週間後、危篤状態となり帰らぬ人となった。最後の言葉となった。後日になって、4年以上もの期間、自ら進行性大腸癌と闘いながら、脳外科手術道に命を捧げ続けてこられたことを知った。

その後6年間、その言葉を常に胸に刻んで手術研鑽を行ってきた。その永田和哉先生と全く同じオーラを放つ先生に出会った。天皇陛下の執刀医の天野篤先生である。心臓弁膜症を煩った父を、自らも執刀医師団に加わり治療を行った経験を持つ。その最後の手術後に、息を引き取られたと聞いた。自らの父を、医師である自分が立ち会った手術で失った経験が、心臓外科医としての医師道を探求する人生を背負わせたのだといわれた。そして、医師道とは、“みずからを極限にまで追い込んで、高い能力を発揮できる心と力である”と教えていただいた。

父、永田先生、米国の賢人医師たち、天野先生。医師道を貫き通した生き様を見せつけられてきた。自らもそうした医師道を引き継いで、貫きたいと心から思う。そうしてこのメッセージを次の世代に伝える役割を担い始めているのだと気づく。

出会いは巡る、出会いは必然であると考えざるを得ない。

会おう人全てが、未来への橋渡しとなっていると確信している。

会おう人全てに、いい影響を与えたいと常に願って日々を過ごしている。

中富浩文  
(医学系研究科)